



くろかみ

女を、地下室の壁に、塗り込めた。

髪の高い女だった。くせのない、まっすぐな髪の高。

首を絞めると、驚いたように、瞳いっぱい、私の顔を映した。

艶のある瞳の表面に涙がたまり、膨張していく。

とうとう、溢れ、すうーっと零れ落ちた。その頃にはもう、瞳の輝きは失せ、虚ろになっていた。

だが、髪の高は、あせることはなかった。体を横たえると、髪は、より一層の深みを増し、しっとりとして重く、褥の上を流れた。

焚き染められた、伽羅の香りが息苦しい。

汗ばんだ首筋に、生き物のように渦巻く一筋の髪の高を払うと、白い首筋が現れた。

そこには、むごたらしい赤紫の花が、散っていた。

私のことを、愛している、といった。

だから、殺した。

地下室の西側の壁は、アルコーヴになっていた。その奥に、もたせ掛けるように女を置き、最後の口づけをした。

額に、妹にするような、優しい接吻を。

死体は、本当に美しい。

生の執着を捨てた体は、物質的ななまめかしさを、備え始めていた。

私は身を引き、少し離れて女を見据えてから、ぎゅっ、と抱き寄せた。

強張った固い感触が、私の体を無言で押し返す。

耐えきれず、長い長いキスを、唇にほどこした。

息苦しいほどに長く、乱暴なキスを。

女の唇が、笑ったように、薄く開いた。

微かに、血の味がした。

腐敗する直前の、甘美なあまさ。

胸の高さまでレンガを積み上げ、最後の別れを告げた。

女は俯き、その表情を、うかがい知ることはできない。

私は、誓った。

——お前を、決して忘れない。

黒髪が、わずかにそよいだ気がした。石膏の強い匂いに混じって、微かに、伽羅の香りが漂ってきた。

しばらく女を眺め、さらに、レンガを積み上げた。

それから、多くの女たちが、この部屋を訪れた。

皮膚が瑞々しく張り切ったの、バランスをとって骨ばってるの、あちこちが丸く突き出て柔らかいの……。

さまざまな夜があった。

どれも、退屈なばかりだった。

朝。

名残惜しげに、あるいは白けた顔をし、また、言い訳を口にしつつ、さらには、再開の空約束をして、女たちは、部屋を出、帰っていった。

その程度には、聡明だったのだ。

明るい昼の光の中、夜の邪気を払い、次なる男を物色する為に。

彼女らの、母親や、そのまた母親のように、時には、他の女を蹴落として、連綿と続けられてきた、命の連鎖を、自らもまた、受け継ぐ為に。

昼の光に帰ることなく、ここに留まったのは、一人だけ。

壁に埋められた、あの、……。

——愛している。

そう言った、あの……。

愛。

私を愛する者に、生きる価値はない。

だから、殺した。

少し、疲れた。

一人寝が恋しくなった。

ただ、月の光にのみ、抱かれて眠りたい。

そんな夜が、誰にでも訪れる。

一人のベッドは、清潔なシーツが、冷たく、すべすべとしていて、心地よかった。

四肢を思い切り伸ばしても、触れるものどてない。

どうしてこの快楽を、長い間、忘れていたのだろう。

満足の溜息をひとつ吐き、私は、深い眠りに落ちた。

気がつくと、粗末な鉄製のベッドに寝ていた。マットレスはなく、固く狭い、むき出しの天板に、直に、横たわっている。

……体が思うように動かない。

部屋は暗く、湿った匂いがした。固い天板が、背中と後頭部に、ごつごつとあたる。

だが、寝返りを打つことは、できなかった。

もちろん、起き上がることも。

声を上げて、無駄だということは、よくわかっていた。この広い屋敷には、私の他には、誰もいない。

暗闇に目が慣れてくると、ここが、地下室であることがわかった。

女を埋めてから、この部屋に、立ち入ったことはなかった。地下へ続くドアは、板で打ち付け、封印したはずだった。

……なぜ、ここに？

遠くで、微かな女の笑い声がしたように思った。鈴を転がすような、楽しげで、でも寂しそうな、嬉しそうで、恨みがましい……。

「お前か？」

暗闇に、私は、問うた。

一際濃い闇の向こうで、何かが蠢いた。

そこは、部屋の西の壁。

かつてアルコーヴがあった辺りの闇が、どんどん濃くなっていく。

しゅるしゅるしゅる……。

長虫の這いずるに似た音が、暗闇の底から聞こえてきた。

音は、うねりながら、近づいてくる。冷たい床を、何かが、滑り寄ってくる。

しゅるり。

床を大きく掃く音がして、ベッドが軽く揺れた。ついに、私が横たわるベッドの下まで、到達したのだ。

不意に、静寂が訪れた。

ベッドの鉄の脚にぶちあたった何かが、逡巡している気配がする。

耳が痛くなるくらいの静けさが、かえって、私以外の存在を誇示している。

数分とも数十分とも思えるほどの時間が経ち、何かを束ねたような先端が、ちくりと、右腕に触れた。

反射的に手をひっこめようとしたが、私には、動くことができない。

動けない腕を、ためらうような一刷けが、そっと舐めた。

全身が、総毛だった。

それは、右腕を撫でるように、上に向かって、するすると滑っていく。すぐに肩に到達すると、横に折れ、胸のあたりにたゆたった。

私の胸を甘く噛むように、丸く流れる。

私は、せいっぱいの努力で、首を擡げた。

髪の毛だった。

冷たく、しっとりと重い髪の毛の房が、肌の上を、黒々と流れている。

首を、僅かに傾げてみると、西の壁、かつて女を埋めたアルコーヴの辺りから、黒い、まっすぐな髪が、伸びてきているのがわかった。

髪は、私の胸まで伸び来たり、しゆるしゆると渦巻いている。

しつこいほどに執念深く、とぐろを巻いて、いつまでも流れ続けている。波打つ黒さが、時折、きらりと光って見えた。

伽羅の匂いがした。

どれほどの時が流れたろう。

思う存分に時を過ごす、髪先端が、僅かにもちあがった。

意志あるものの如く、下腹に向かって、静かに這い下っていく。

壁から手繰り出される髪は、尽きることなく、肩から胸、腰へ向かって、滑らかに流れ続ける。

私は、自分が、裸であることに気がついた。

それは、退屈ではなかった。

全身の力を抜いて、冷たくしなやかな愛撫に身を任せた。

第二波が、左腕に絡みついた。

同じように、肩口から胸へ、そして、腹へ向かって滑ってゆく。

壁からあふれ出す二筋の髪が、上半身を愛撫するがごとく、流れ続けている。

つやつやした髪の表面が、ひんやりと冷たく、私の体を、上から下へと愛撫していく。

三波、四波は、足先から登ってきた。くすぐるように指先を巻き込み、さんざんじらしてから、足首に絡まり、ゆっくりと上へのぼってくる。

動けない体になす術はなく、されるがままになるよりほか、なかった。

だが、私は、それを望んだ。

壁は、次々と新たな髪の流れを生み出し、飽くことがない。

腰、脇、体のあらゆる部位に、髪が巻きついてきた。

冷たく、しっとりとした量感のあるそれらに、私は全身を絡め取られていた。

……うふふ。

確かに聞こえた。

新たに壁から湧き出た髪の毛、尖った先端が、唇に、そっと触れた。

ちくり。

血の味がした。

瞬間、全身を覆った髪の毛の流れが、緊迫を増した。

快楽が、苦痛に変わった一瞬だった。

全身を激しく締め付けられ、意識が、次第に、遠のいていく。

伽羅の香りが、一層、濃くなった。

……これで、あなたは、わたしのもの。

最後の一房が、静かに顔を覆い、呼吸を奪ってゆく。

全身が、つややかな髪の毛の繭に、封じ込められたのが、わかった。

くろかみ

<http://p.booklog.jp/book/103919>

著者：せりもも

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/serimomo139/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/103919>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/103919>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ